

**話し合いを活発にし、共に学ぶ子どもの育成**  
**—技術科を見据えた図画工作科の授業実践を通して—**

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域

今川智博

## 1 はじめに

### (1) 教職大学院入学理由

私が教職大学院に入学した理由は、授業実践力を身に付けたいと思ったからである。学部時代の教育実習では、製作を主とする授業展開の中で、子どもたちは楽しく活動してくれたが、教えるべきことを教えることができなかったという悔しい経験がある。これを改善させるためには、教えるべきことを教えることのできる授業実践力が必要であると考えた。本大学院には、学校サポーター活動をはじめ、様々な実習の機会がある。これらの実習を通して授業実践力を身に付けることができると考え、本大学院へと入学した。

### (2) 授業実践力を身に付けるため

授業実践力を身に付けるためには、実践に必要な理論が必要である。そして、その知識を活かして実践経験を積むことで、理論と実践の融合した授業実践力を身に付けることができる。

本大学院基礎領域では、一年次に、学級づくりや授業づくり、学校づくりに関わる講義を通して、教師に必要な理論を学ぶことができた。その知識を活かしながら、一年次後期より始まる学校サポーター活動、二年次に行われる教師力向上実習などで、実践経験を積んだ。学校サポーター活動、教師力向上実習Ⅰ、Ⅱを通しての豊橋市立東田小学校（以後、実習校と記す。）での実践経験（主に、一年次：第三学年、二年次：第四学年）は、それまで経験してきた教育実習などとは、大きく異なり、子どもたちの姿を長期間継続して見ることができ、子どもたちの成長や変化を実感することができた。本稿では、実習校での授業実践を通しての学びについて述べる。

## 2. 主題設定の理由

### (1) 共に学ぶ子ども

新しい学習指導要領においては、思考力・判断力・表現力等を育成するため、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動を重視するとともに、知的活動（論理や思考）等の基盤といった言語の果たす役割を踏まえて、言語活動を充実することとしている。

文部科学省は、言語活動の充実において、互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させることが必要であると述べている。

資料1：『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』<sup>注1)</sup>

「考えを伝え合うことは、自分の考えになかったものを受け入れて自らの考えに生かしたり、相手の立場や考えを考慮し、尊重することで自分の考えや集団の考えを発展させることにつながる。

そのためには、集団の中で児童生徒がそれぞれの考えを表明し合うことを通じて、いろいろなものの見方や考えがあることに気付き、それぞれの考えの根拠や前提条件の違い、特徴などをとらえることが重要である。また、それぞれの考えの違いや特徴を確認し合いながら、それらの考えを整理することを通して、更に自分や集団の考えを振り返り、考えを深めることが重要である。」

このことから、思考力・判断力・表現力等を育成するためには、子どもたちが互いの考えを伝え合うことのできる授業展開を設定することが重要である。本稿では、互いの考えを伝え合う子どもの姿を共に学ぶ子どもと設定し、その姿をめざすこととする。

また、本稿では、図画工作科の授業実践を通して共に学ぶ子どもの姿をめざす。

図画工作科学習指導要領では、指導計画の作成にあたって、「A表現」の指導において、「児童が友人と共に活動することを楽しむ傾向を生かし、適宜共同して製作する内容を取り入れること。」と示している<sup>注2)</sup>。

共同して表現することは、様々な発想やアイデア、表し方などがあることにお互い気付き、表現や鑑賞を高め合うことにつながる。活動を設定する場合には、児童の実態を考慮するとともに、児童一人一人の発想や技能などが友人との交流によって一層働くようにすることが大切である。特に、一人一人が共に活動に参加しているという実感がもてるように工夫することが重要であり、決められた部分を受けもつだけで活動が終わらないようにする必要がある。

本稿では、自分の考えや集団の考えを発展させることをねらいとして、子どもたちが共同して活動に取り

組むことのできる場面を設定した図画工作科の授業実践を行うこととする。

## （２）技術科を見据えて

平成 20 年 3 月、文部科学省は新しい学習指導要領を告示した。今回の改訂において注目すべき点の一つは、小学校における学習の接続性を図ることを明示したことにある。これは、学習指導要領の最低基準性に関わった重要な指摘であり、今回の改訂においては、新学習指導要領改訂の初期から議論され、最終的には、「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」の（3）において、「小学校における学習を踏まえ、他教科等との関連を明確にして、系統的・発展的に指導ができるように配慮すること」と示された<sup>注 3)</sup>。周知の通り、技術分野の学習は現在の義務教育課程の 9 年間の中で、中学校段階の 3 年間のみに存在してきたものであり、小中の連携についての検討は十分ではない。また、実践レベルにおいても、いくつかの研究的取り組みが進められてきたが、十分な成果を上げた取り組みは少ない<sup>注 4)</sup>。

学習指導要領においては、「A 材料と加工に関する技術」の（1）について「小学校図画工作科、家庭科などの学習をふまえ、中学校における学習の見通しを立たせるために、第 1 学年の最初に履修させること」と示された<sup>注 3)</sup>。埼玉大学、浅田らは、技術的素養を高めていく基礎には、技術分野における基礎的な知識や技術を獲得し、それを発展させ、小学校段階での学習経験が重要な役割を果たすと述べている<sup>注 4)</sup>。また、福岡教育大学、有川らは図画工作科は、小学校における技術教育を展開する具体的な場として、大いに検討され活用されるべきであろうと述べている<sup>注 5)</sup>。

そこで、本稿では、小学校教育課程と中学校技術・家庭科技術分野の円滑な接続のため、技術分野における基礎的な知識や技術の獲得をめざした小学校図画工作科授業実践について述べる。

具体的には、技術・家庭科技術分野の内容の一つである「A 材料と加工に関する技術」の（3）「イ 工具や機器を適切に使い、製作品の部品加工、組立て及び仕上げができること。」<sup>注 3)</sup>を見据えて、図画工作科、第 3 学年及び第 4 学年の内容の一つである「A 表現」の（2）「ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表すこと。」<sup>注 2)</sup>についての授業実践を行う。この授業実践では、電動糸のこぎり盤の安全な使用についての技術の獲得をめざす。

## （３）活発な話し合い

国際的な調査、国内における全国的な調査などの結果から、思考力・判断力・表現力の育成が課題であることが明らかになった。また、学校教育法においても、

「思考力・判断力・表現力等」が学力の重要な要素として示された。そして、その育成の手だてとして、教育活動全体で言語活動の充実を図ることが重要であることが指摘された。それは、言語が「知的活動（論理や思考）」「コミュニケーション」「感性・情緒」の基盤であり、言語活動を通して言語に関する能力を育成することが、思考力・判断力・表現力の育成につながるからである。

本稿では、主に特別活動や道徳の時間についての授業実践を取り扱うことから、それぞれの言語活動の役割について述べる。

### ① 特別活動

特別活動は、小社会とも言える学校生活を教育の対象とし、そこでの望ましい集団活動を通して「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度」や「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力」を育成することを目標としている。そして、その中核的な活動として、話し合いなどの言語活動を捉えている。

このようなことを踏まえ、特別活動の目標を実現していくため、特に次のような言語活動の役割がある<sup>注 6)</sup>。

- ア 集団として意見をまとめる（集団決定をする）ための話し合い活動
- イ 自己の生き方について考えを見定める（自己決定をする）ための話し合い活動
- ウ 実践活動や体験活動を通して感じたり、気付いたりしたことを振り返り、まとめたり、発表し合ったりする活動

### ② 道徳

道徳の時間では、中心的な資料が生かされ、子供の体験や資料に対する感じ方や考え方を交えながら話し合いを深め、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることが多い。その意味からも、道徳の時間における言葉の役割はきわめて大きい<sup>注 7)</sup>。

国語科で培われた言葉に関わる基本的な能力を基本に道徳の時間では、資料や体験から感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合い、討論や討議などにより自分と異なる考えに接する。具体的には、資料の内容や登場人物の感じ方や考え方などを考える、友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり、書いたりする、さらに、ねらいとする道徳的価値に関わる様々な体験を通して感じ、考えたことを、言葉を用いて生かし合ったりする。このような言葉の能力を生かして学習に取り組ませることが道徳の時間の言語活動の役割である<sup>注 7)</sup>。

#### (4) 本実践のねらい

本実践の主題を、『話し合いを活発にし、共に学ぶ子どもの育成—技術科を見据えた図画工作科の授業実践を通して—』と設定する。

具体的には、以下のような姿をめざす。

- ① 子どもたちが活発に発言をする姿
- ② 子どもたちが互いのやさしさを感じあい、友だちを意識する姿
- ③ 適切に電動糸のこぎり盤を使用することのできる姿
- ④ 子どもたちが友だちと共同して、電動糸のこぎり盤を使用しながら、活動に取り組む姿

まずは、教師力向上実習Ⅰを通して二つの子どもたちの姿をめざす。一つ目は、実習校独自の活動であるお話タイムを通して、子どもたちが活発に発言をする姿をめざす。二つ目は、友情の価値をねらいとした道徳の授業実践を通して、子どもたちが互いのやさしさを感じ合い、友だちを意識する姿をめざす。

教師力向上実習Ⅱでは、技術・家庭科技術分野を見据えた図画工作科の授業実践を通して二つの姿をめざす。一つ目は、技術・家庭科技術分野の内容と図画工作科の内容の関連項目から、安全に電動糸のこぎり盤を使用することのできる姿をめざす。二つ目は、図画工作科特有の共に学ぶ姿である、子どもたちが友だちと共同して、電動糸のこぎり盤を使用しながら、活動に取り組む姿をめざす。

### 3 教師力向上実習Ⅰ

教師力向上実習Ⅰの主なねらいは、学級経営についてである。私は、学級経営についての教師力を向上させるために、互いに協力し合い、教え合う姿をめざし、子どもたちが発言しやすい雰囲気を作ることをねらいとした。そこで、実習校で実践されている教育活動「お話タイム」と道徳の授業実践を通じて、ねらいを達成させることに努めることとした。

#### (1) お話タイム

お話タイムとは、実習校において朝の活動として行われている活動である。子どもたちが自由に発言することのできる集団作りと子どもたちが互いにに関わり合いながら学習に取り組むことのできる集団作りをねらいとしている。活動の内容は、水曜日にテーマについての自分の考えを個々のノートにまとめ、金曜日にテーマについての話し合いを15分間行う。学級の実態に応じて、全員発言であったり、前の友達につなげてであったりといった話し合い活動のねらいが提示される。また、結論を出すことを主目的にはおかず、話

し合いの術を身に付けることを主目的として行われることが多い。

テーマを「春のスイッチ、みんなでポン!」と設定することで、子どもたちが国語科で学習した「春のスイッチ」と関連させながら子どもたちが自分たちの成長したい力をスイッチに見立ててどのようなスイッチが必要かを話し合うこととした。

#### ① 実践のねらい

実践のねらいとする子どもの姿は、以下の通りである。

ア 子どもたちが積極的に発言をする姿。

イ 他者の考えを意識する姿

実習学級の実態は、第四学年である。年度はじめではあるが、子どもたち同士、互いのことを知り合い、休み時間に遊ぶ場面も多い。しかし、授業時間になると、一部の子どもの発言が目立ち、一度も発言することなく一日の学校生活を終えてしまう子どもたちもいる。そこで、子どもたちが積極的に発言をする姿をねらいとした。加えて、今後を見据えて、子どもたちが互いに協力し合い、学び合う姿を願い、他者の考えを意識する姿をねらいとした。

#### ② 実践の手立て

ねらいを達成させるために以下の手立てを講じた。

ア 意図した指名ができるように、児童の考えをノートをとおして把握した。

イ 児童が他者と関わり合うことができるように、お話タイムの冒頭で、発言のめあて「前の人につなげて」、聞くめあて「うなずく」を伝えた。

ウ 多くの児童たちが発言しやすいように、考えの中から、意見の一番多かった(6人)「大きな声」に関わる意見を最初に取り上げた。

エ 最初の発言者は、一番多い意見であったこと、「みんなの」と学級の全員で成長したいという視点があったこと、その児童に大きな声で臆することなく発言できるようになって欲しいという教師の願いがあったことから、教師の意図により指名した。

オ 二番目の発言者以降は、全員発言につなげたいことから、起立し自由発言で発言を行うようにした。

カ 児童たちの発言が円滑に発表されるように、学級の自由発言のルールとして、廊下側の列から順に発言というルールがあり、それを活用した。

キ 全員発言を達成するために、教師は聞き手と板書に徹し、多くの児童の発言がテンポよくできるようにした。

ク 全員発言を達成するために、自由発言のなかで、

すでに発言した児童は、まだ発言していない児童に権利を譲るというルールを提案した。

ケ 他者との関わり合いを達成させるため、最後にノートに「友達のよかった意見とその理由」を記入する機会を設けた。

### ③ 実践の成果と課題

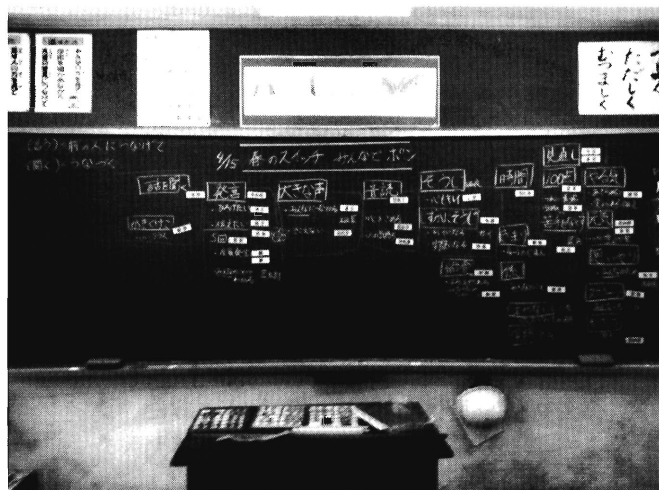
実践の成果と課題については、以下のとおりである。

成果を○、課題を▲で示す。

- 34名中、32名の子どもたちが発言をすることができた。
- 他の子どもを意識した発言が見られた。
- ノートから、他の子どもの意見に賛同する記述が見られた。
- ▲ 他の子どもたちに関心をもち、他の子どもたちについて記述することのできる姿をめざしたい。

子どもたちが積極的に発言をする姿というねらいについては、達成された。図表1のとおり、34名中、32名の子どもたちが発言を達成することができた。

図表1：お話タイム板書結果



また、他者の考えを意識する姿というねらいについては、関連する意見について「〇〇くんに似ていて」など他の子どもを意識した発言をすることができたこと、ノートから、他の子どもの意見に賛同する記述も見られたことから、達成されたと考える。

お話タイムの実践を通して、子どもたちがもつ「発言をしたい」「考えを伝えたい」という思いを感じ取ることができた。また、聞く姿勢を提示したことにより、子どもたちは、発言をしている子どもの意見に耳を傾けることができるようになった。子どもたちの発言する力、発言を聞く力を確認することができた。今後の実践では、他の子どもたちに関心をもち、他の子どもたちについて記述することのできる姿をめざしたい。

## (2) 道徳

### ① 実践のねらい

実践のねらいとする子どもの姿は、以下の通りである。

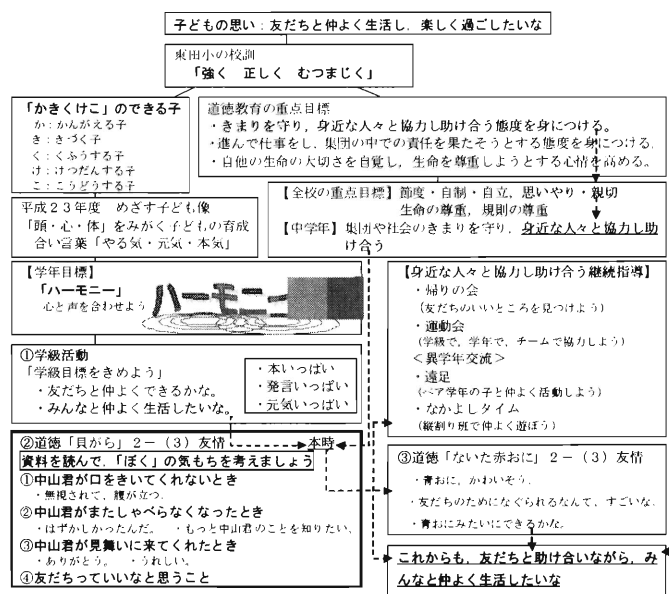
ア 子どもたちが互いのやさしさを感じあい、他の子どもたちについて記述することのできる姿

道徳の授業を実践するにあたって実習学級の実態は、第四学年である。気の合った友だちという時間を楽しみ、より親密になろうとする傾向がみられる。休み時間には、校庭で仲よく遊ぶ光景をよく見かける。困っている子に手を貸す場面が見られるため、さらにその場面が増えて、友だちと協力して学校生活を送るようにしたい。

そこで、新学年に進級した四月に、健康的な仲間集団をつくるように願い、互いに理解し、信頼し、助け合うことの大切さに目を向けさせたいと考えた。

本実践で取り扱う資料は、進級して間もない学級で、転校生の友だちと心が通じ合っていくぼくの心の変化を扱っている。ぼくと同様に進級して間もない子どもたちに、ぼくの気持ちを共感させることで、その心の変化について考え、子どもたちが互いのやさしさを感じあい、他の子どもたちについて記述することのできる姿をねらいとする。

図表2：道徳授業単元構想図



### ② 実践の手立て

ねらいを達成させるために以下の手立てを講じた。  
ア 教師が情感を込めて朗読することで、資料の世界を理解させる。

イ 図表 3にあるように、挿絵を通して、場面を把握させた。

ウ 中心発問を提示した後に、自分の意見をまとめる時間を設けることで、子どもたち一人一人の考えが明確になるようにした。

エ うれしいぼくの気持ちと批判的な気持ちと比べることで、気持ちの変化に気づかせた。

オ 図 2のように、①「なぜ中山君がしゃべらなくなったか」②「ぼくは中山君とどうなりたいか」③「ぼくはどうしたらいいか」と発言を類型化しながら板書することで、ぼくの思いに気づかせた。

カ 友だちを理解することの大切さに気がつくことができるように、最後にノートに「友だちからやさしさを受け取った経験」を記入する機会を設けた。

キ 書くことの苦手な児童がノートへの記述ができるように、「友だちからしてもらって、うれしかったことはないか」と机間指導で発問した。

図表 3：道徳授業板書結果



### ③ 実践の成果と課題

実践の成果と課題については、以下のとおりである。

成果を○、課題を▲で示す。

○ ノートから、友だちのよさについて記述をすることができた

▲ 友だちと課題を解決する姿をめざしたい。

本実践の結果、友だちからやさしさを受け取った経験について、子どもたちは「けがをしたときにたすけてくれた。」などの辛い場面で助けてくれた経験を記述するものいれば、「サッカーをしてあそんでいるとき。」などの普段の何気ない遊びの場面を記述するものもあり、さまざまな場面で友だちのよさに気付くことができた。このことから友だちと仲よくなるためには、互いに理解し合うことが大切であることに気づかせることというねらいは達成されたと考える。

道徳の授業実践を通して、子どもたちが友だちのよさに気がつくことができたことから、今後の実践では、友だちのよさをより強く感じることができるよう、新しく出会う課題に対して協力し合いながら取り組むことのできる場面を設定することで、不安を感じてしまうような場面でもたくましく友だちと課題を解決する姿をめざしたい。

## 4 教師力向上実習Ⅱ

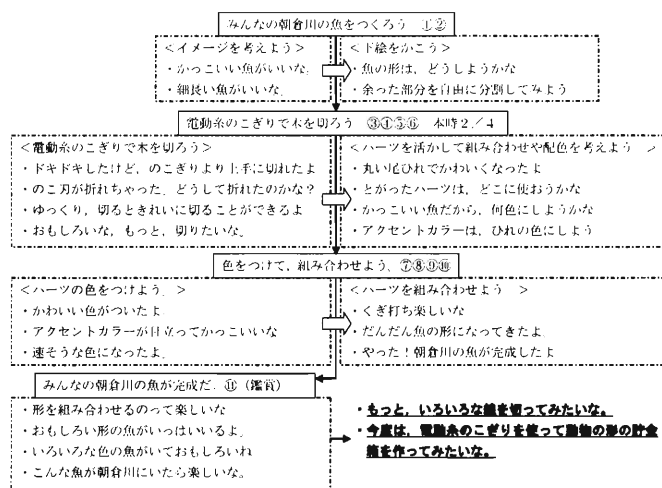
教師力向上実習Ⅱは、主なねらいは、授業づくりについてである。私は、授業づくりに関する教師力を向上させるために、教師力向上実習Ⅰでの子どもたちが発言しやすい雰囲気づくりの教師力を生かしながら、互いに協力し合い、教え合う姿をめざした。そこで、技術・家庭科技術分野の課題である、小学校との連携を見据えた図画工作科の授業実践を通じて、ねらいを達成させることに努めることとした。

### (1) 実践の概要

本実践は、技術・家庭科技術分野の課題である、小学校との連携を見据えた図画工作科の授業実践である。機器の取り扱いに関わる知識・技能に焦点を当てて、電動糸のこぎり盤を使用した題材を取り扱った。

題材名を「糸のこすイス、朝倉川でスイスイ」と設定し、子どもたちになじみのある、実習校の近くを流れる朝倉川の魚たちを自由に表現することをねらいとした。

図表 4：図画工作科授業単元構想図



### (2) 技術科を見据えた図画工作科の授業実践

本実践は、11 時間完了の題材の中で 3~6 時間目にあたる「電動糸のこぎり盤で木を切ろう」の中から、電

電動糸のこぎり盤の扱い方について説明を行った後、子どもたちが取り扱い始める4時間目の授業実践である。

### ① 実践のねらい

実践のねらいとする子どもの姿は、以下の通りである。

- ア 安全に電動糸のこぎり盤を使用することのできる姿
- イ 友だちと共同して、電動糸のこぎり盤を使用しながら、活動に取り組む姿

図画工作科の授業を実践するにあたって実習学級の実態は、第四学年である。子どもたちは、日常生活の中で出会う道具について「さわってみたい」「使ってみてみたい」という好奇心が非常に強い。しかし、工作機器については、日常生活の中で出会う機会が少なく、操作が複雑であるという理由から取り扱う経験は、ほとんどない。そこで、新たな工作機器との出会いとして電動糸のこぎり盤の取り扱いを構想した。電動糸のこぎり盤を安全に用いて、自由に切ることを楽しむことで創作意欲を高めたい、また、切り取った形の特徴をいかして自由に組み合わせることで構想する力も身につけたいと考え本題材を構想した。本題材は、電動糸のこぎりを安全に用いて、思い思いに切り取る。のこぎりとは異なる作業の難しさと面白さを十分に味わわせることで、より複雑な線を切ることが可能となる喜びやものづくりの楽しさを感じてもらいたい。具体的には、掲示資料などを活用しながら、安全に電動糸のこぎり盤を使用することのできる姿と、友だちと共同して、電動糸のこぎり盤を使用しながら、活動に取り組む姿をめざすこととする。

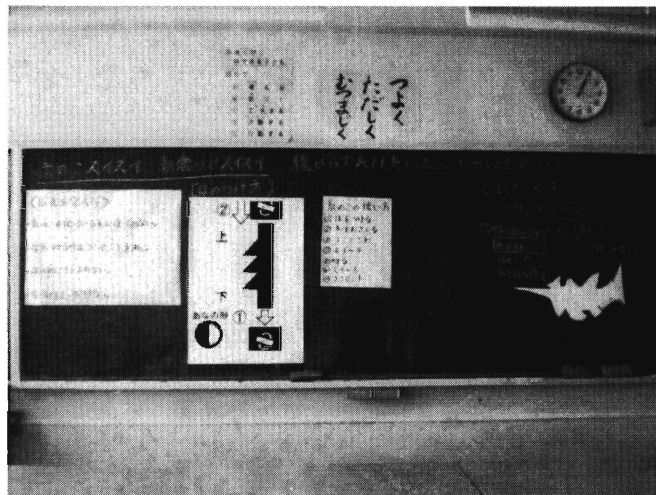
### ② 実践の手立て

ねらいを達成させるために以下の手立てを講じた。

- ア 図表5、6のように使用上の注意点を掲示しておくことで、いつでも注意点について確認をすることができるようにした。
- イ 糸のこぎりを使っていない時は、机で組み合わせと配色を考えるように指示をした。
- ウ 2人ペアで加工に取り組むことで、安全な使い方について確認し合えるようにした。
- エ 下がきどおりに切れなくても、おもしろい形ができることを伝えることで、加工することを楽しむことができるようにした。
- オ 折り紙を用いて色の組み合わせについて試すことができるようにすることで、アクセントカラーを利用した配色を考えることができるようにした
- カ パーツの形に着目させることで、形を生かした組

- み合わせや色を考えることができるようにした。
- キ 自分の作ろうとする魚のイメージを想起させることで、特色ある色の選択ができるようにした。
- ケ あらかじめ、片付け開始時間を伝えておくことで、見通しをもって活動に取り組むことができるようにした。

図表5：図画工作科授業板書結果



図表6：電動糸のこぎり盤の使用方法の掲示



### ③ 実践の成果と課題

実践の成果と課題については、以下のとおりである。

成果を○、課題を▲で示す。

- 子どもたち自ら、使用の注意点を確認しながら、活動に取り組む姿が見られた。
- 友だちと共同して、電動糸のこぎり盤を使用する姿が見られた。
- パーツの組み合わせを何度も試しながら、形を生かした配色や組み合わせを考える姿が見られた。
- ▲ 子どもたちが安全に機器を使用しながら、自由に表現する姿をめざしたい。

実践の結果、子どもたちは、はじめての電動糸のこぎり盤との出会いであったことから、電動糸のこぎり盤を見て「ミシン！」と発言する姿も見られた。また、活動開始直後は、電動糸のこぎり盤の操作に対して、不安を感じる様子が見られた。しかし、「早く、使いたい。」と新しい道具との出会いに期待を寄せる発言も見られた。

電動糸のこぎり盤の使用方法については、使用の注意点を黒板に掲示しておくことで、いつでも注意点について確認をすることができるようにしたことにより、子どもたちは、自分で確認をしながら活動に取り組むことができた。また、電動糸のこぎり盤の付近にも使用の注意点を掲示しておいたことにより、使用について、意識しながら取り組むことができていた。

電動糸のこぎり盤を取り扱った加工の活動では、子どもたちに電動糸のこぎり盤を取り扱う子とサポートをする子でペアになって取り組ませることで使用方法についての確認を確実に行うことができた。また、作品を抑えながら、電動糸のこぎり盤が動作している状態での電源スイッチや速度調節スイッチの操作を行う場面では、電動糸のこぎり盤を取り扱う子が作品を電動糸のこぎり盤の切削の際に生じる抵抗に負けないように抑えることに集中できるよう、サポートの子がスイッチの操作を行うようにしたこと、子どもたち同士、共同しながら、活動に取り組む姿が見られた。

図表 7：サポートの子がスイッチを操作する様子



パーツの配色や組み合わせについて考える場面では、折り紙を利用してアクセントカラーについて検討したり、パーツの組み合わせを何度も試しながら、形を生かした配色や組み合わせを考える姿が見られた。

子どもたちの感想からは、資料 2 のように活動を通じて、電動糸のこぎり盤への思いが「怖さ」から「楽しさ」へと変容する様子が見られた。また、電動糸のこぎり盤の使い方について、黒板などで何度も確認をすることができるようにしたこと、安全に使うこと

で楽しく取り組むことができることを理解した様子が見られた。

#### 資料 2：楽しさを感じた感想

「電動糸のこぎり盤で、最初は少しこわかったけど、やってみたらけっこう楽しくて、安全に使えば、たのしくあぶないんだなと分かりました。」

これらのことから、電動糸のこぎり盤を通して、今まで実現することの難しかった複雑な線を切ることが可能となり、喜びを感じることができていたことから、喜びや楽しさという観点からねらいは、達成されたと考える。

課題としては、本実践のねらいをのこぎりとは異なる作業の難しさと面白さを十分に味わわせることで、より複雑な線を切ることが可能となる喜びやものづくりの楽しさを感じてもらいたい。と設定したが、資料 3、4 のように「しっぱいした」、「ずれてしまった」と感じてしまう子どもたちがいた。下書きの線の通りに切ろうとした結果である。作業の難しさを味わうことができた結果でもあるが、より複雑な線を切ることが可能となる喜びやものづくりの楽しさを感じてもらいたい。と設定していることから、線にこだわらず、より複雑な線を切ることには挑戦していくことができるように、「下書きの線にこだわらず、いろいろな線が切ることができるように挑戦してみよう」と電動糸のこぎり盤で切削をする活動を行う上でのより具体的なねらいを設定し提示するべきであった。今後の実践でも、電動糸のこぎり盤を取り扱う活動が継続されることから、具体的なねらいを提示しながら、より複雑な線の切削に取り組むことができるようにし、喜びやものづくりの楽しさを感じることができるようにしたい。

#### 資料 3：失敗したと感じた感想

「わたしは、楽しくきれいました。でも、ちょっと、しっぱいしてしまいました。少しむずかしかったです。」

#### 資料 4：線からずれたと感じた感想

「ちょっとむずかしくてずれちゃったりした。いたがガタガタいって大へんでした。」

### (3) 単元を通じた実践の成果と課題

実践の成果と課題については、以下のとおりである。

成果を○、課題を▲で示す。

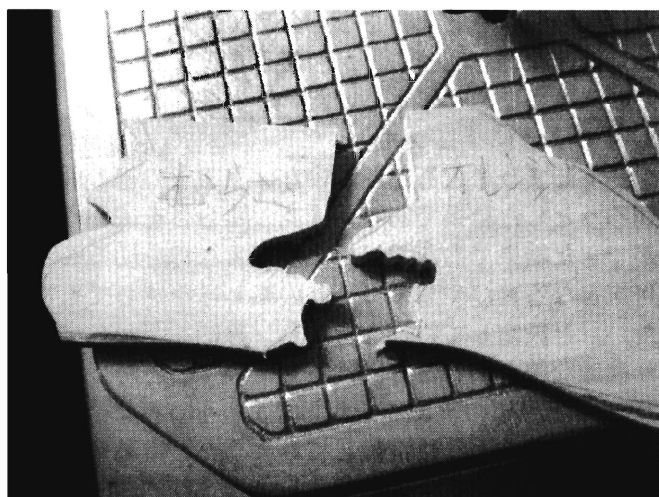
- より複雑な線に挑戦する姿が見られた。
- 技能の向上を感じている感想が見られた。
- 組み合わせを試行錯誤する姿が見られた。
- ▲ 子どもたちが共に課題を共有し、解決しようとする姿をめざしたい。



技術科を見据えた図画工作科の授業実践を行った後に、引き続き 3~6 時間目にあたる「電動糸のこぎりで木を切ろう」、7~10 時間目にあたる「色をつけて、くみあわせよう」の授業実践を行った。

3~6 時間目にあたる「電動糸のこぎりで木を切ろう」の授業実践では、4 時間目の授業実践での課題をもとに、「下書きの線にこだわらず、いろいろな線が切ることができるように挑戦してみよう」と電動糸のこぎり盤で切削をする活動を行う上でのより具体的なねらいを設定した上で 5、6 時間目の授業実践を行った。これにより、図表 8 や資料 5 のように、より複雑な線に挑戦する子どもの姿が見られるようになった。

図表 8：より複雑な線に挑戦したパーツ



資料 5：より複雑な線に挑戦した感想

「直線で下書きしたけど、きる時に曲げてみたりしたら、もっときれいになったので、とてもうれしかったです。」

他には、電動糸のこぎり盤の取り扱い経験を積む中で、子どもたちには、資料 6 のように、前時よりも技能の向上を感じることができている姿が見られた。

資料 6：技能の向上を感じた感想

「1 回目の時よりも糸のこを上手に使えるようになった。すごく楽しいからずっとやっていたい。」

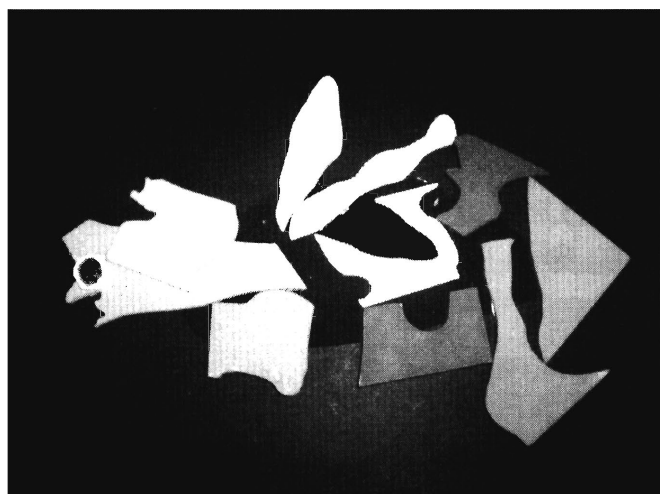
7~10 時間目にあたる「色をつけて、くみあわせよう」では、これまでの活動で思い思いにパーツを切り取り、1、2 時間目に「みんなの朝倉川の魚を作ろう」で構想したアイデアと異なったパーツができあがったことから、改めて、アイデアを考える時間を設定した。この時間では、形を生かしてというねらいを設定することで、子どもたちが楽しみながら挑戦したパーツの特徴を生かすことができるようにした。これにより、子どもたちは、図表 9 のように何度もパーツを組み合

わせながら、アイデアを構想する姿が見られた。

図表 9：組み合わせを考える様子



図表 10：子どもの作品



#### （４）技術科への展望

本実践は、小学校 4 年生での技術・家庭科技術分野の内容の一つである「A 材料と加工に関する技術」の（2）「イ 材料に適した加工法を知り、製作図を工具や機器を安全に使用できること。」<sup>注3)</sup>を見据えた実践である。子どもたちは、掲示物を通して、自ら使用方法を確認したり、ペア学習を通して、友だちのサポートなど共同して取り組むことで、安全に電動糸のこぎり盤を使用することができた。特に、子どもたちは、活動の安全を確保するために以下①から④の適切な行動をとることができた。

- ① 電源や各スイッチに対する注意
- ② 周囲への安全確認
- ③ 使用中の異状の有無に対する注意
- ④ 使用後の清掃

これらの安全を確保するための行動は、図画工作科

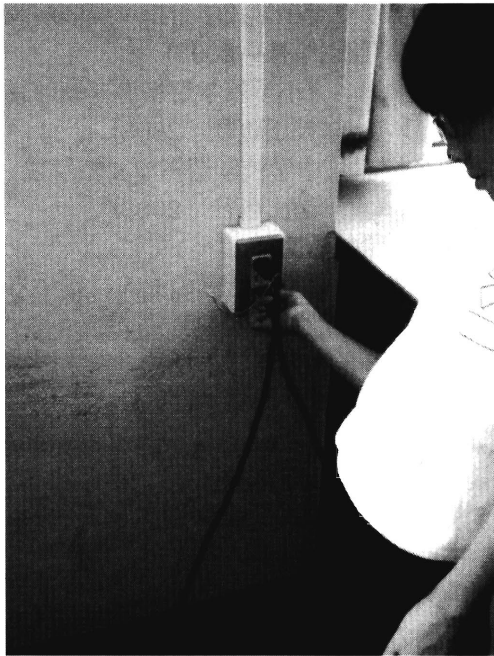


に限らず、技術・家庭科技術分野の活動においても必要なことである。

このことから、子どもたちは将来、技術・家庭科技術分野の学習に取り組むにあたり、「A 材料と加工に関する技術」の（3）「イ 工具や機器を適切に使い、製作品の部品加工、組立て及び仕上げができること。」

注 3) の内容における、電動糸のこぎり盤の使用に限らず、卓上ボール盤やその他の機器の使用においても適切に使用することができるようになると考えられる。

図表 11：電源に注意する様子



## 5 3つの実践を通して学んだこと

### （1）共に学ぶ子ども

共に学ぶ子どもについて以下①、②の二つの姿が見られた。

- ① 共同して活動に取り組む姿
- ② 課題を共有し、共に考えあう姿

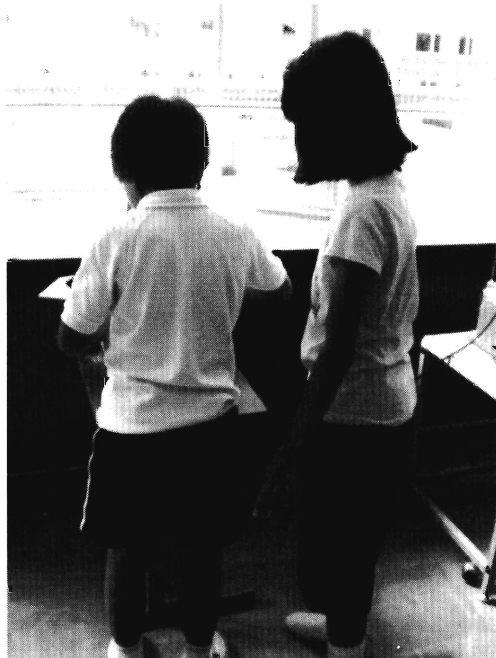
①の姿については、図画工作科の授業実践の中で見られた。子どもたちは、友だちと様々な発想やアイデア、表し方などがあることに気づくことができ、より複雑な線の加工に取り組もうとする姿につながっていた。

②の姿については、道徳の授業実践の中で見られた。子どもたちは、共に主題の登場人物の思いについて考え、それを発表しあうことができた。子どもの中には、友だちの意見を聞くことで、再度考え、新たに発表する姿も見られた。

①、②と共通して子どもたちは、友だちの考えや表現と触れ合うことで、新しい考えや表現を生み出すこ

とができていた。子どもたちが共に学ぶことは、学びが深まるという観点から重要なことであると感じた。

図表 12：共同して活動に取り組む姿



### （2）学級づくりと授業づくりの関連性

学級づくりの実践を通して、前年度に比べて子どもたちの授業での発言が活発になった。これは、お話タイムや道徳の授業実践を通して、学級の中で自分の発言を聞いてもらえるという経験を積むことができ、子どもたちが学級の友だちを信頼し、安心して本音で発言をすることができるようになったからであると考えられる。

子どもたちの変容から、子どもたちが学級の友だちを信頼し、安心して本音で発言をすることのできる学級づくりは、子どもたち一人一人の考えや意見を大切にすることのできる授業づくりへの規範へとつながり、関連していると感じた。

## 6 おわりに

教職大学院2年間のすべての学びを通して、子どもたちに寄り添いながら、子どもたちのために、様々な教育活動を実践していきたいと考えようになった。

実践を通して、子どもたちが協力しながら、課題に取り組む姿勢を見ることができた。今後も、子どもたちが関わり合いをもちながら協力し、子どもたちが主体となって課題に取り組む姿を大切にしたい。

しかし、入学理由にあった教育実践力を身に付けるという自己課題は未だに、解決は、されていない。実践の中でも、共に学ぶ子どもというねらいは達成されていない。これらの課題を4月より中学校の教員となっても継続して取り組んでいきたい。

具体的には、子どもたちが教え合いながら課題に取り組む、そして学ぶ姿をめざしたい。そのために、技術・家庭科技術分野を担当することから、まず、題材の製作における構想について子どもたち一人ひとりの考えをペアやグループ、学級などで発表することのできる場を設定する。その場を通して、他者の構想を考えたり、それを教え、また、他者の助言をもとに、個人に立ち返って構想を考え直すことのできる学習展開を実践していきたい。

#### 【付記】

実践は、以下の学校で行った。

##### (1) 学校サポーター活動 (約1年間)

豊橋市立東田小学校

(堀田道夫校長先生、大岩義男校長先生)

##### (2) 教師力向上実習Ⅰ及びⅡ (各4週間)

豊橋市立東田小学校 (大岩義男校長)

##### (2) 特別課題実習 (8日間)

豊田市立東保見小学校 (新見隆一校長先生)

##### (3) 教師力向上実習Ⅲ (2週間)

豊橋市立芦原小学校 (根木真太郎校長先生)

##### (4) 多様なフィールド実習 (5日間)

豊橋市立図書館

尚、実習中は多くの先生方にご指導ご助言を頂きました。本来ならばお一人ずつお名前を挙げるべきですが、省かせて頂きます。お世話になったすべての先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーター活動で継続的にご指導して下さった神谷孝男先生、白井正康先生、佐藤洋一先生、教師力向上実習Ⅰ及びⅡでご指導下さった白井正康先生、佐藤洋一先生、多様なフィールド実習でご指導下さった萬屋育子先生、教師力向上実習Ⅲでご指導下さった萩原孝先生、修了報告書について最後まで懇切丁寧にご指導下さった白井正康先生に、心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

#### 【注記】

<sup>注1)</sup> 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』(2011)

<sup>注2)</sup> 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』(東洋館出版社 2008)

<sup>注3)</sup> 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』(東洋館出版社 2008)

<sup>注4)</sup> 浅田茂裕 「小学校教育との円滑な接続を図る技術科導入教材のあり方」  
(『教材学 現状と展望 下』 2008)

<sup>注5)</sup> 有川誠・中富愛弓 「小学校「図画工作科」における技術教育展開の可能性」  
(『福岡教育大学紀要 第55号』 2006)

<sup>注6)</sup> 杉田洋 「特別活動における言語活動の充実と

その具体化」

(『初等教育資料 平成23年7月号』2010)

<sup>注7)</sup> 赤堀博行 「道徳における言語活動の充実とその具体化」

(『初等教育資料 平成23年7月号』2010)

#### 【主な参考文献】

##### 1 新学習指導要領関係

(1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』(東洋館出版社 2008)

(2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』(東洋館出版社 2008)

(3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 道徳編』(東洋館出版社 2008)

(4) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』(東洋館出版社 2008)

(5) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』(東洋館出版社 2008)

##### 2 学び合いに関わる文献

(1) 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』(2011)

(2) 鈴木文部科学副大臣『小学校「新学習指導要領スタートパック」の発送について』

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/senseioun/1304743.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseioun/1304743.htm) 2011)

(3) 愛知教育大学附属岡崎中学校 『次代を創る一学びを深め合う授業の実現から一』

(明治図書 2010)

##### 3 言語活動の充実に関わる文献

(1) 杉田洋 「特別活動における言語活動の充実とその具体化」

(『初等教育資料 平成23年7月号』2010)

(2) 赤堀博行 「道徳における言語活動の充実とその具体化」

(『初等教育資料 平成23年7月号』2010)

(3) 岡田京子 「図画工作科における言語活動の充実とその具体化」

(『初等教育資料 平成23年7月号』2010)

##### 4 技術・家庭科技術分野に関わる文献

(1) 浅田茂裕 「小学校教育との円滑な接続を図る技術科導入教材のあり方」

(『教材学 現状と展望 下』 2008)

(2) 有川誠・中富愛弓 「小学校「図画工作科」における技術教育展開の可能性」

(『福岡教育大学紀要 第55号』 2006)

(3) 山本利一 「技術科の安全管理と指導」  
(日本産業技術教育学会 『新 技術科教育総論』 2009)

##### 5 その他の文献

(1) 文部科学省 『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』(2010)